

黄金郷

上野ちづる

Coriolus versicolor



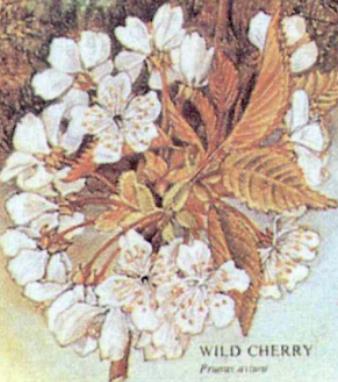
DOG'S MERCURY
Mercurialis perennis



GROUND-IVY
Glechoma hederacea



WILD CHERRY
Prunus avium



YELLOW
ARCHANGEL
Lamiastrum galeobdolon



BROAD BUCKLER-FERN
Dryopteris dilatata



句集

黄金郷

上野ちづこ

江里昭彦編

夜叢書

工业学院图书馆
藏 章

黄金郷

一九九〇年一〇月一〇日 印刷
一九九〇年一〇月一五日 発行

著者 上野千鶴子

編者 江里昭彦

発行者 齋藤慎爾

発行所 深夜叢書社

〒162 東京都新宿区早稲田鶴巻町五五二
電話 ○三一二〇七一八〇六四
振替 東京九一一四五八三一
千田ビル四〇二

印 刷 欧文整版
本 製富士製本

© 1990 by Tizuko Ueno

はじめに

これは俳句です。この本は、だから、句集と言うことになります。これを俳句と思わない人は、さようなら。

一九七二年から八二年までの十年間、わたしは俳句をつくってきて、ようやく俳人を廃業することにしました。およそあらゆる詩人のかくれたのぞみは、詩をつくりらずにすむようになることなのです
が、わたしもそのゴールに到達したようです。わたしの作品は、これ以上一句もふえません。だからそれを記念して、処女復帰句集を、刊行することにしました。

作品は、クロノロジーにしたがって編まれていますが、ふつうとは反対に、逆編年体に配列されています。読者はわたしとともに、俳句を書かなくてすんだ始源の言語への旅を、あゆんでもらうことになります。

黃金鄉／目次

EL Dorado

へわたしのためのポリフォニー

快楽の終点／江里昭彦 (18)

ことば師

20

からんどりえ

22

選民伝説

26

同胞

32 30

孵卵期

鳥

34

ほんとうごっこ

38

花便り

40

パックス・ジャボニカ

42

四文字のバラード 40

作品評／竹中 宏 ⑤〇

甘藍郷またはエルドラド

やはり、ちつこ頌／江里昭彦 ⑤四

地下鉄地獄 58

マダム呪々 62

合評抄 65 • 68
66 70

補陀落行

予言者受難 72

都市へ 76

百科全書派以後 78

過ぎし時への献歌 80

花田清輝追悼——「復興期の精神」抄

高桐院連弾 86

夏の終わり 88

雨の森 90

帆走 92

冬芽 94

ルバイヤート拾遺／江里昭彦 ⑥

幻視者 98

II

片歌恋唄——またはナルシスの匣 103

意味からの遁走——私のハイク・ノオト

俳句の私 120

「私」の解体——「俳句の私」再論 129

俳句のよみ方 133

偏愛的一句評 138

玩具箱の中から ¹⁴¹

雑感 ¹⁴³

俳句の解体または解体俳句 ¹⁴⁶

III

シン・ポジウム 江里昭彦／工藤大悟／玖勢野博／上野ちづこ

十年の後——あとがき ¹⁷⁷

IV

V

解説——上野千鶴子の反「女流」俳句

あるいは跡を濁して飛び去った鳥について 江里昭彦

後記——更なるあとがき、あるいは出産顛末記 江里昭彦

裝幀 編集
齋藤慎爾 江里昭彦

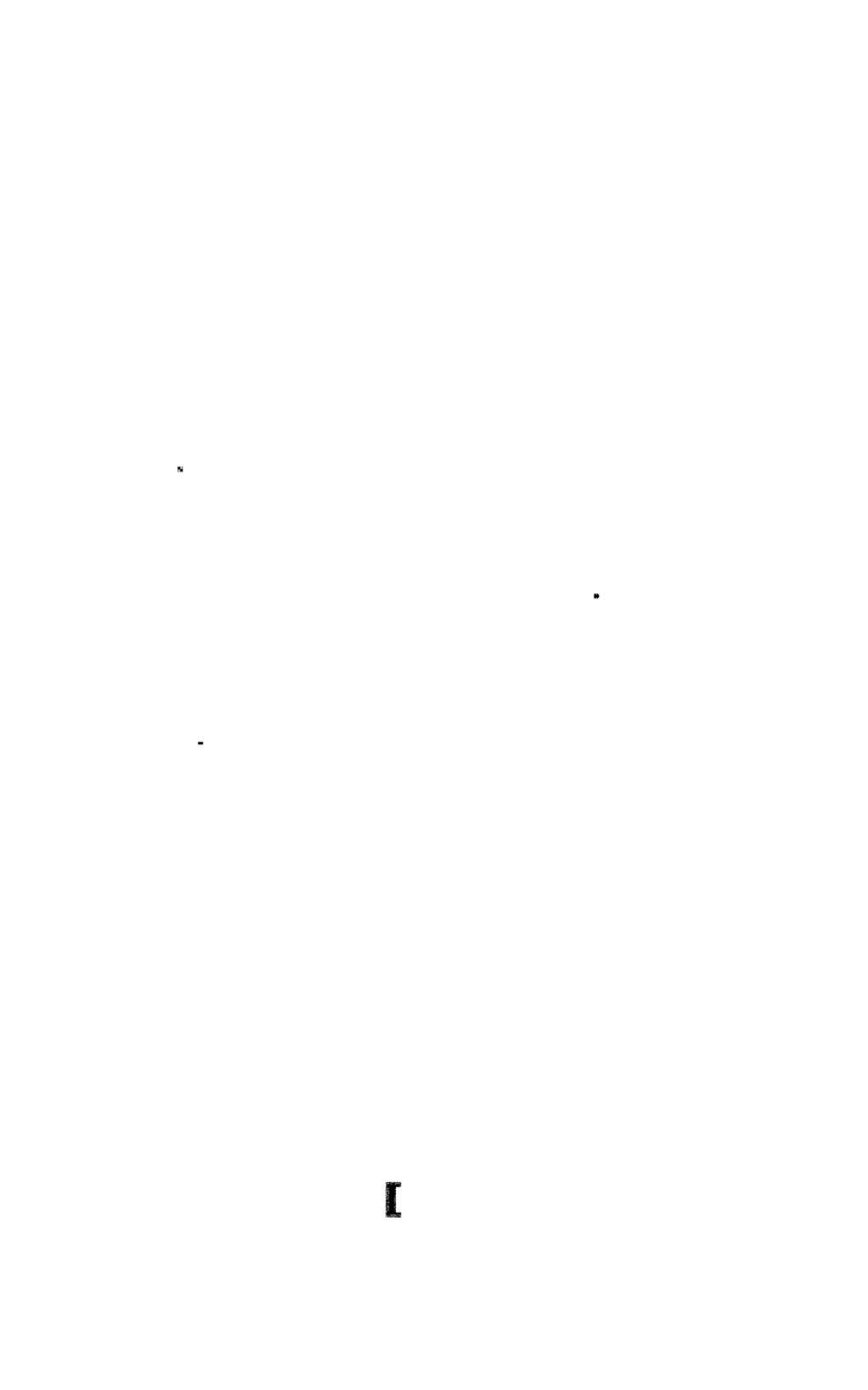
试读结束：需要全本请在线购买：www.ertongbook.com

黄
金
郷

ナルシスの匣

—ちづこ秀句三十選 江里昭彦編

- ナルシスの匣
——ちづこ秀句三十選 江里昭彦編
- 愛咬の前後溶けゆく時間の端
記憶の分布地図にある腐蝕
柑橘の甘き昏倒
わが脱自
エンサイクロペディア海の深さを藍で知る
木の実落ちる時の地のピアニッシモ
海に向きあう連綿と死に続けてきた家系
春羊齒類ももいろドレスの中に満ち
俺が齧つた歯形をつけて月が缺け
耳鳴りは海の音補陀落行せよと
海路なれば三拍子の曲を偏愛す
縮尺が間違っている短脚犬
まず一本喫つてからチュトワイエ
誕生日だから感情の大浪費
纏足がぞろぞろ地下生活者の上を
- イテマエ 据汚さざる白衣の样
ひやくえ
睡する尿する 地の自淨力疑えば
ホルモン屋にくれてやる救急外科の裏口から
暗殺者の手が撫でている青い尻
故障した子供たち 廃園の花として
不機嫌である特權 娘たちに
翼 全天を覆う 曇り
日毎の包丁 夜毎の殺意
遮音室で高くなる 耳鳴り
子供は鳥 かはたれとたそかれにさざめく
婚礼の荷に入れる 弟の義足
みんな蹴落とす 方舟のピルグリム
欲望の沖へ 髪を濡らして
さらわれてみる わたしの境界線
なぞなぞはいつも何がのぞみ?
わたしというミスキャスト 幕が降りるまで



「わたし」のためのポリフォニー

俳句を、退屈だと思いながらここまで来てしまった。たぶん言靈のようなものの力が、わたしを把んで離さなかつたからだろう。口に出してしまった時に、それが言いたかつたことだと気づくような言葉。何がのぞみときかれる——やってしまつたことを、のぞんでいたとしか、言いようがない。誰がわたし？——あらわれてしまつた、いくつものわたしに耐えつづけるほかない。わたしたちは、見る私と見られる私の境が不分明な時代に生きている。そのような表現の現在に、わたしは特権者でなく、立ち会いたいと思う。

いま・ここからの全力遁走曲

ことり墮つ死病列島

女ばかりが信心ぶかい祖国

みんな蹴落とす方舟のピルグリム